

ICPIC2022 への応募

応募団体：P4C in schools KANSAI-JAPAN, 応募代表 梶形 公也（大阪教育大学・武庫川女子大学教授）

- (1) 発表形式 シンポジウム
- (2) タイトル「P4C で変わる日本の教師」
- (3) 要旨（以下）

日本でも、学校教育現場での「子どものための哲学」(P4C) の実践に関しては、様々な研究や報告がなされている。その内容は、例えば、P4C の基本的特質を踏まえた上で、学校教育現場にどのように導入すべきか、各教科の中でどのようにP4C を用いるかといった方法に関するもの、その有効性と効果、評価の難しさなどであって、必ずしも日本に固有の内容とは言えない。

しかし、日本における学校文化そのものに、たとえば、年度毎にクラス替え、数年後には別の学校に転出、教科中心の授業などに、日本におけるP4C の展開に影響を及ぼしているものがあるのではないだろうか。

これと関連して、日本ではP4C のための公的な研修制度が存在していないため、教師はそれぞれ自らの関心、つまりなぜP4C に関心を抱いたのかという動機に基づき、それを原点にしてP4C を用いた授業を展開せざるをえない。

しかしながら、このような状況がかえって、個々の教師が自らの工夫によって、様々な授業を展開することにつながっている。それは、教科中心、教師中心の授業のあり方から、教科を超えた、あるいは教科を横断した、子ども中心の授業への転換を引き起こしてきた。

従来からの授業のあり方への疑問、しかしそれをどう自覚し変革していくかへの戸惑い、それは、授業のあり方の変容であると共に、あるいはそれ以上に、教師そのものの変容を要求することになった。このことが、P4C を活用する教師が、教師としての自分のあり方の反省を促している。

(a) シンポジウムの目的、ねらい

今回のシンポジウムでは、P4C を実施する教師の苦しみや戸惑い、不安に耳を傾ける場を共に共有することができる場を提供したい。できれば、そのような場から、特に、他国からの参加者との意見交換を通じて、P4C を用いた教育のあり方における日本の特徴が浮かび上がるようにする。

(b) シンポジウムの構成とタイムテーブル

構成：現場の教師4名によるプレゼンテーション+フロアを交えての質疑応答

タイムテーブル：発表15分×4名+質疑応答30分

シンポジスト：北浦貴之（都留市立東桂小学校）、城野知佐（大阪教育大学附属平野小学校）、辻明典（福島県小学校教諭）金澤正治（兵庫県西宮市立浜脇小学校）

司会：梶形公也（大阪教育大学・武庫川女子大学 名誉教授）